



ボルネオ紀行

川崎光洋

夕暮れのシンフォニー

夕暮れのジャングルは音に満ちている。

ひとしきり蝉しぐれが充満した後には、テナガザルの「ホゥホゥホゥ」というデュエットが聞こえてくる。そのデュエットに応えるかのようになまた別のグループが遠くで鳴き交わす。

鳥たちの声も一段と高まる。そして林冠の間から覗かれるわずかな空の残照が消え、懐中電灯の明かりが威力を増す頃になると、今度は虫たちの出番だ。

日本でおなじみのキリギリスやスズムシのような鳴き声がさかんに聞こえる。木の高い茂みで、鳥の鳴き声と同じような高い声で鳴くのはカエルの集団だ。一生を木の上



で暮らすカエルもいるのだという。「キョッ」というかん高く鋭い声に思わず身を竦めれば、今度はリスの鳴き声だ。森全体に響くような大きな声である。

捕食者が横行する昼と夜の境目は、多くの動物たちが声で自らの存在を主張する凝縮された時間なのだ。視界の利かないジャングルでは、自らの存在を示すには鳴き声を出すしかない。縄張りを主張するにしても、雌を呼び寄せるためにも声は頼りである。

だから彼らはみんな命をかけて鳴く。鳴くことは生きることなのだ。あるものはゆったりと、あるものは激しく、あるいは低く、高く、それはさながら自然のシンフォニーのようでもある。今日もボルネオの森は命にあふれている。

ナイトサファリ

私が訪ねたのはボルネオ島の熱帯雨林である。島西北部のセピロック自然保護区はオランウータンが生息している世界でも数少ない場所のひとつだ。

ここの保護センターのレンジャーであるアブラムの案内で夜のジャングルを探索することになった。セピロック自然保護区には広大な原生保護林が残っていて、オランウータンの生息を観察するため、観察路がジャングルの中に張り巡らされている。

「熱帯雨林の動物たちを見たいなら、夜が一番だ」

サファリストに身を包み、いかにも役人然とした副所長のパジャウ氏は私にベテランガイドをつけ



てくれると言う。

地球上でもっとも多様な生物が住んでいるといわれる熱帯雨林だが昼間、森の中に入ってみると、鳥の気配がするぐらいで、大型の哺乳類はおるか昆虫でさえ目にするこ

とが少ない。熱帯雨林の動物の多くは林冠と呼ばれる高い木の上部に生息していて、めったに地上に降りて来ることはないのだ。さらに多くの動物たちは夜行性なのである。

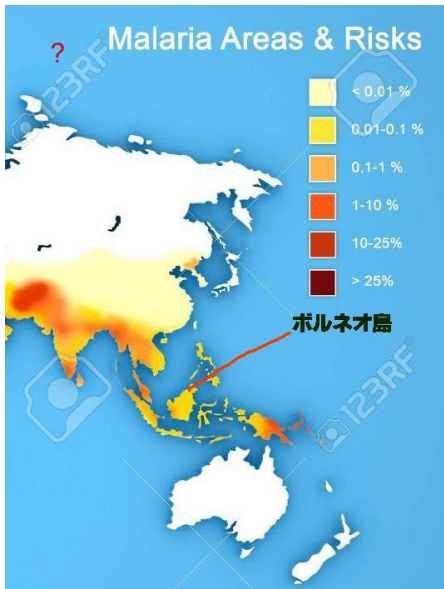
「今夜は満月に近いし、大型の鹿がうじゃうじゃ出てくるぞ」

パジャウ氏はしり込みしている私に、何を迷っているのか、当然行くべきだという自信あふれる態度で今夜のナイトサファリを薦める。

しかし日本を発つ前に調べたボルネオは、風土病や感染症の情報で満ち満ちていた。とくにマラリア対策として、夜の外出は可能な限り避けるべきであると、どのテキストも指摘していた。

「マラリア蚊が怖いのですが、大丈夫ですかね」

「蚊に好かれるやつとそうじゃな



いやつがいる。お前は大丈夫だ」

パジャウ氏は冗談ともつかぬ意味不明の返答で「ノープロブレム」と両腕を広げる。地元の連中は、マラリア予防薬など誰も飲んでいないし、ここではマラリアになったやつもないという。

世界保健機関（WHO）のレポートでは、ボルネオ・サバ州はマラリア感染の高危険度地域として地図が色分けされていたのを思い出したが、せっかくの彼の好意を無

碍に断るわけにはいかない。その上、蚊が怖くてしり込みしたとあっては私の沽券にもかかわるというものだ。

宿舎に戻り、日本から持参した「ムシバイバイ」なる虫よけスプレーを帽子から靴の先まで全身隈なく振り掛け、「日本の夏・金鳥の夏」の携帯式蚊取り線香を腰にしっかりとぶら下げ準備万端。念には念を入れ、蚊は柑橘類の香りを嫌うという現地情報を元にレモン汁を顔と手足に丁寧に塗り込む。

闇にうごめくものたち

アブラムが現れたのは西の空にまだ残照が残る午後七時前。背は私より低く百六十センチほどだが、三十代中頃の肩幅の広い、頑丈そうな男である。顔は浅黒く、精悍なとい

うよりどちらかといえは獯猛といったほうがいいような顔つきの男で、鼻の下に真っ黒なげじげじ髭を蓄えている。分厚い唇の奥にどかい金歯がきらりと光った。出で立ち漁師が穿くような太ももまであるゴム長靴、上着はポケットがたくさんあるグリーンの迷彩色のジャケットである。腰には頼もしげな蛮刀（バラン）をぶら下げている。これなら獲物を絞め殺すといわれるニシキヘビと遭遇しても、ものけ姫に誘惑されようと大丈夫であるう。

アブラムが私の服装と荷物を点検し、ベリーナイスと頷いて、先に立つ。オランウータン見学の一般客用に作られたきれいな木道をしばらく進み、「係員以外立ち入り禁止」の標識があるゲートを、アブラムが



鍵を開けて潜り抜け、私もあとに続いた。ここから先はレンジャー用の細々とした観察路になる。アブラムが先に立って、張り出したツル性の植物などを切り分け進んで行く。鳥の声に似たカエルの合唱が耳を圧

するほど響き渡る。

われわれが進むすぐ先に、バサバサと大きな音を立てて、人間の胴体ほどの太さの枝が落ちてきた。ジャングルでは常に新陳代謝が繰り返されており、成長しきって腐った枝がたびたび落ちてくるそうだ。パジャウは、何トンもある大木が倒れてきて、危うく下敷きになりそうになったこともあるという。

夜とはいっても気温はまだ三十度ぐらいあり、その上、湿度はおそらく百パーセント近いだろう。少し歩くと汗が滴り落ちてくる。汗を拭うタオルが瞬く間にずしりと重くなり、牛乳瓶一本分ぐらいの水が簡単に絞りだせる。一時間も経つと下着はもとより、帽子から靴下まで水に飛び込んだかのような状態になってしまった。

アブラムはうっすらと汗をかけた程度である。周りの茂みを懐中電灯で盛んに照らして、何かを探している様子だ。そのライトが一点に集中して動かなくなった。光の先を黙って指差す。頭上はるかな高さの梢に黄色く光るものがある。じっとしていて動かないが、目だけがキラッと反射した。

双眼鏡を取り出す。ムササビである。ゴルフボールほどの果実を両手で握り、こちらを気にしながら盛んに齧っている。四十センチぐらいの胴体に長い尾がついている。腹面が黄色身を帯びたクリーム色、背面が赤みを帯びた茶色である。しばらくすると見事な滑空で茂みの奥に消えていった。

次に光の先が止まったのは観察路脇の木の幹の下の方だ。今度はす



ぐ分かった。名前は聞き漏らしたが、日本のヤスデの親分みたいなのやつで、長さが三十センチぐらいもある。三十本ほどの足をサワサワと動かして木の幹を上り始めている。明かりがまぶしいのか、頭の先にある髭みたいな触手を激しく振っている。

結構、俊敏に動き回り非常に気味が悪い。牙を持つが咬む力は弱く、毒もないという。しかし汗でびっしょり濡れた体になにやら鳥肌らしきものが走り、思わずブルッと身震いました。

熱帯雨林の魅力というのは種の多様なのだが、それは樹高五十メートルにも及ぶ森の立体構造から来るものだ。ボルネオのジャングルはフタバガキ科の高木類（日本ではラワンと呼ぶ）が優勢で、時には樹高七十メートルにも及ぶ。光合成の大部分は地上から五十メートルもある林冠部で行われ、つる性の植物や着生植物もそこで開花したり結実したりする。このため林冠部には花や果実に依存する昆虫などが数多く暮らし、さらにそれを狙う捕食者たちが横行する。



一方で林床部は朽ちて積もった葉っぱや生物の死骸を腐食、分解する菌類やきのこ類の天下である。

われわれの眼には一様に見えるジャングルも、一つひとつの生物にとって見ればそれぞれの種族のテリトリーのPATCHワークのように

見えるのではないだろうか。

足元から頭上まで満遍なく目を配りながら二時間ほど歩いた。すでに一リットル入りのペットボトルの水は残りわずかである。子供の頃見た映画の中に、ジャングルで、喉の渴きを覚えた探険家が、太いつる性の植物を鈍で切断すると、切り口から豊富な水が流れ落ち、それを口で受けて呑むシーンがあったことを思い出した。砂漠でもあるまいし、脱水症状で死ぬこともあるまいと、意を決し再びアブラムの後を追うが、すでに下着から上着まで水を含んだ衣服のため体が重い。

ジャングルの中の池

つる性植物が激しく絡み合い、下草が茂った藪を悪戦苦闘しながら潜り抜けると突然、静かな水面が目



の前に現れた。長径五十メートルほどの楕円形の池である。池の上だけ空を覆う林冠が切れて、赤く潤んだような月が水面を鈍く照らしていた。アブラムと池端の藪の中に身を潜めて、鹿を待つことにする。「いまの季節だとやつらが現れる

のは每晚九時ごろだ」アブラムの口ぶりは自信に満ちている。月明かりで眼が赤く光るからすぐ分かるという。昔はその赤い眼をめぐらして散弾銃をぶっ放したものだ。アブラムは月明かりに金歯を光らせてうそぶく。

私は自慢のニコンのデジカメD70を三脚にセットし、月明かりでも大丈夫なように撮影感度を千六百に設定、三百ミリの望遠レンズの機能を目一杯生かし、何とか自慢のショットをものにしよう。と池の対岸を見つめる。

大きなこうもりが月をよぎって飛んでいった。風はまったくない。熱帯の星は瞬かない。青黒い空に静かに張り付いているだけだ。まさに草木も眠るといった風情である。息を殺して身を寄せ合って、待つこと

一時間。目当ての鹿たちは一向に現れる様子がない。

「やつらは時計を持っているのか」と声を潜めて話しかける私の冗談も少し詰問調になる。

「もうすぐだ。今日は月が明るいから・・・」

となにやら副所長の説明と違う。

それからさらに三十分近く経った。私が中腰で身を潜めているあたりの地面は、滴り落ちる汗で水溜りができそうな勢いである。さすがに腹も減ってきた。対岸の藪に一心不乱に目を凝らし続けても、ねずみ一匹現われる気配はない。

その時だ。アブラムが「リーチ」と低く呟いて、あっちを向けという。ついに現れたかと身を引き締め、そっと体の向きを変えた。アブラムが蛮刀を抜き出すのが見えた。再び

「リーチ」とつぶやくと、私の頭を手で押さえて、蛮刀を首筋に軽く当たった。

目の前に差し出された蛮刀の刃の先は、真っ赤に濡れていて、たっぷりと血を吸って太った蛭がミミズのようにごめいている。

「ぎゃ※？、ぐえ☆！母」

音を立ててはいけないのも忘れ、私は思わず藪を飛び出した。当然のことながら今夜の鹿の生態観察はまたの機会にお預けということになったのであった。

熱帯雨林の名物、山蛭

マラリアを媒介するハマダラ蚊や Dengue 熱の元凶、ネッタイシマ蚊などといったことばかりに気を取られて、蛭のことをトンと失念していたのである。もはや委細かまわず

懐中電灯でわが身を照らし、徹底捜索にかかる。まず靴下の網目にもぐりこんで、まさに通り抜けようともがいているやつを右のくるぶしの辺りで二匹発見。まだ血は吸っていないと見えて、体調五センチ、太さ



は電線ほど。茶色に緑色の縞が入っている。虎の模様に見立てて、タイガーリーチというそう。リーチがマージャン用語ではなく、蛭のことだと納得。こいつは靴下を脱いで払い落とす。

ズボンをたくし上げてみると、左足のふくらはぎに丸々と太ったやつが一匹いる。指でちぎり取ろうとすると、アブラムが押し留めた。蛭の歯が肉に食い込んでいるので、変なはがし方をすると歯が残って、血が止まらないという。

蛭は前吸盤の中央に顎歯が七十〜八十個並んでいて、吸血する時はこの歯を使って皮膚を逆Y字型に血を吸う。ヒルジンという血液を固まらせない物質を出し、それと同時に痛みを感じさせないモルヒネのような物質を注入するため、吸血さ

れていても気がつきにくいし、血が止まらないのだ。

敵の作戦にひたすら感心ばかりしていられないが、これが生きるための知恵というものだろうか。

アブラムがタバコを取りだし火をつける。タバコの火を押し付けるのが一番手っ取り早いという。

「そんなにうまそうに吸っていないで早くやつつけてくれ」

「待て、待て、少し火勢を強くしないと」

アブラムは、せっかく点けたタバコなので少しでも味わおうという態度である。

「おい、帰ったら一箱買ってやるから早く頼むよ」

「トアン（旦那）、約束だよ」
脛毛がこげるにおいがし、私の皮膚も熱くなりかけた頃になって、よ



うやっと蛭は噛みついた歯を離し、転がり落ちていった。彼らだって必死なのである。彼ら

は血を吸うために動物を追い回すことはできない。たまたま自分の目の前を動物が通りかかれば、その体に飛びついて血を吸う。

通りかかってくれなければ、血を吸う機会はない。その機会は数ヶ月に一度、悪くすると一年に一度あるかないかの機会なのだ。

柔肌に熱き血潮がたっぷりと流れている私のような存在は、まさに千載一遇の機会だ。彼らにとってはフォアグラとキャビアをロマネコンティとともに流し込むぐらいの悦楽に違いない。

帰心矢の如し

こうなると、体中がなにやらムズムズしてくる。ジャングルの中で真っ裸になって蛭探しというわけに

も行かないし、早く宿舎に帰って水を頭からかぶりたいと、帰心矢のごとしである。カメラのセットを早々に片付け、あたふたと撤収にかかる。

これしきのことと逃げ帰ったのでは、銃靶で茂みを掻き分け、鉄兜で泥水をすすり、空腹を抱えてこのジャングルに斃れた日本の兵隊さんたちに申し訳ない、いやいや、沖繩戦のひめゆりの乙女たちの苦難にももとのではないかと歯を食いしばってはみたものの、気は一向に奮い立たない。

往路は動物たちを探すのに関心が集中していたが、懐中電灯の光が木の葉に向けてみると、いるは、いるは、蛭など木の葉一枚に二、三匹ずつ這い回っているといった状態なのである。

「このように山蛭が多いのは、無農



薬で重金属に汚染されていない綺麗な森だからだ」

とアブラムは得意げである。鹿が見られなくて申し訳ないと、立ち止まってはなおも動物を探そうとするアブラムを急ぎ立てて、逃げ帰るようにジャングルを飛び出したので

あった。

動物園で動物たちを見るのは簡単だ。しかし檻の中に入った彼らは本当の姿ではない。しかし自然の中で彼らに会うことは容易なことではない。

人工的な環境に慣れ親しんだ私たちが、彼らの生活圏に踏み込むためにはそれなりの覚悟がいる。熱帯雨林のジャングルは人間にとって想像以上に苛酷な環境なのだと思います。知らされた夜だった。

振り返ると、セピロックの森が月明かりに浮かび上がり、私をあざ笑っているかのような声が聞こえてきた。

宿舎のシャワーは、水道が断水中のことで、井戸水を使った即席の手動式シャワーを使用することになっていて。ブリキの石油缶の底に

小さな穴を穿ったものが木の枝に吊り下げたある。そこにバケツで汲んだ水を入れ、すばやく下に潜り込んで、落ちてくる水を頭に受ける。

背中に違和感がある。手を後ろに回すと、ヌメツとしたものが指の腹に触れた。かなり大きい。首筋から潜り込んだ蛭に違いない。木の枝を折り取って、突付くと以外に簡単に剥がれた。おそらく既に腹いっぱい血を満喫した後だったのであろう。

もう一回水をかぶると、足元に飛び散る水が赤く染まった。足元に落ちた蛭はひと思いに踏み潰してやろうと思ったが、大饗宴の満足感に酔いしれているであろう蛭の夢を潰すのもなにやらかわいそうになる。それに、吸われたばかりの自分の血が飛び散るのもおぞましく、そ

っと配水管に流し込んでやった。やつも必死に生きていたのだ。

ジャングルの中の池に水を飲みに来る鹿には出会えなかったが、たくさんのこうもりやそして蛭たちと出会うことができた夜の探索行であった。ジャングルの中では、敵対、競争、共生など、さまざまな生物がお互いに影響を及ぼし合いながら生きている。そのネットワークが熱帯雨林なのである。しかし一つひとつの生物は、そのネットワークを支えるために生きているのではなく、種を保存するために生きているのでもない。自らのために生き、自らのために死ぬのだ。ただどんな生物も、私たち人間でさえも、他の生物との物質・エネルギーの連鎖や情報のネットワークに依存しなければ生きてゆくことはできない。

夜中に夢を見た。たくさんの蛭が私の体に取り付いて、血を吸っている夢だ。汗びっしょりになって目が覚めた。トイレに行くと、私が配水管に流したに違いない蛭が必死に便器の淵を這い上がってきていた。

熱帯雨林と類人猿への憧れ

ボルネオ島へやって来たのは、蛭に血を吸わせるためではない。マレーシア領ボルネオの東北部、サンダカンの近くにあるセピロックの森でオランウータンやテングザルに会うためなのだ。

ボルネオ。かつて、この言葉の響きに胸躍らせた時代が私にはあったのだ。鬱蒼と茂る深いジャングル、動物たちの咆哮、充満する鳥たちの声、息を潜めて獲物を待つ大蛇、首

狩族の饗宴の太鼓の音。私は食い入るようにジャングルを描いた絵本や動物図鑑を眺めていた。

幼い日、私が憧れたのは、チンパンジーを家来に従えたターザンであり、ナイルの水源を求めてアフリカ奥地に分け入った多くの探検家たちだった。

ボルネオもまた探検家たちの侵入を拒む緑の魔界だった。ボルネオは十九世紀半ばまでは、尾の生えた人間がいると多くの人に信じられていた島なのである。

そしてボルネオといえばオランウータン。思春期の六十年代から七十年代は、今西錦司を中心とした京大霊長類研究所の研究者たちが、類人猿研究で世界的な成果を次々と発表した時期と重なる。彼らの研究の根底には、この地球上で人間に最



も近い仲間である類人猿の研究を通じて、「人間とは何か」を考えようとする機運があった。

「わたし」とは何か、「愛」とは何か、「人間同士の戦いは人間に原初的に組み込まれた悪なのか」とい

った、青春の抽象的思考に飽いた私は、ゴリラやチンパンジーの集団に「社会」や「順位」があり、道具の使用も含めた「文化」が存在するという類人猿の観察に強く魅せられた。

その上、彼らのしぐさや表情には他の動物にはない豊かさがある。彼らも私たちと同じようにここをもち、喜怒哀楽を感じていることが強く伺われるのだ。

類人猿よりさらにヒトに近い、人類の親戚と言われるネアンデルタール人のような種族はすべて絶滅している。まさに人類は孤児なのだ。絶滅した種族の中にも我々と同等の知能をもっていたと推測される種族がいたが、我々だけがなぜ生き延び、彼らはなぜ絶滅したのだろうか。

ヒトらしきとは一体何なのか、現存する中で最もヒトに近縁な生き物である類人猿は、この命題を解く鍵を握っている。

いま遺伝子解析により、ヒトと類人猿との遺伝子の違いはわずか数パーセントに過ぎないことが明らかにされた。私たちの進化の隣人ともいべき類人猿を研究し、ヒトとの共通点、あるいは相違点を探ることによって、知性や社会性といった、化石には残らない「こころの進化」を解き明かすことができるかもしれない。

子供の頃夢見た童話の中の動物や探検記の中の熱帯雨林への憧れは、オランウータンやテナガザルが暮らすボルネオのジャングルへの憧れとして再び私の中に蘇ってきたのだ。

ボルネオ島へ

ボルネオ島の玄関はマレーシア・サバ州の州都コタキナバルである。日本からマレーシア航空の直行便で五時間半の旅だ。日本から行くことができる最も近い熱帯といえるだろう。

ボルネオ島は赤道をまたいで北緯六度から南緯四度のまさに赤道直下の島である。月平均気温は二十ハ℃前後でほとんど変化がない。年間降雨量は二千ミリから四千ミリ。面積は日本の約二倍の七十四万平方キロメートル、世界で三番目に大きい島である。

南半分はインドネシア領カリマタン、北半分がマレーシア領である。北部海岸沿いの一角に、地図で見れば米粒のような小国だが、豊富

な石油資源で潤うブルネイという王国もある。

私が目指すサンダカンは、コタキナバルから六十人乗りの小型旅客機で約一時間のフライトだった。山梨を朝方に発ってサンダカンに着いたのは夕暮れ時である。サンダカンはボルネオ島で二番目に大きい街であり、かつては日本への木材輸出港として栄えた町である。作家山崎朋子が海外娼婦「からゆきさん」の証言をもとに上梓したルポルタージュ「サンダカン八番娼館」でもよく知られている。

セピロック・オランウータン・リハビリセンター（SORC）へは、サンダカンの飛行場から施設が手配してくれた車に乗って二十分ほどで着いた。ここはオランウータンの研究の基地であると同時に、住み

かを失った子供のオランウータンを野生の中で生きられるように訓練し、再びジャングルへ戻すために作られた施設である。SORCは一九六四年、サラワク博物館長の妻、ババーラ・ハリソンの提唱によって始められた。

当時のこの地方では、オランウー



タンの子供がペットとして一般的に飼われていたし、また肉が珍味として高く売れたため、外国にまで輸出されたのだそうだ。ハリソンの保護運動は行政を動かし、SORCが設立された。現在はマレーシアの森林局に属し、センターには二十七人の職員と乳幼児から六歳までの三十八頭のオランウータンがいる。

また職員とともに、現在三人のボランティアが活動している。この施設では、ニヶ月のボランティアプログラムが用意されており、ボルネオの自然、動物・植物相、獣医学基礎、行動観察記録法などの講座を受講した後、ボランティアの活動に参加する仕組みになっている。

ボランティアプログラムの中の参加条件の項目を見ると、オランウータンの保護に関心があることと

並んで、高温多湿の環境に耐えられる体力と、虫や蛇との接触到に平気なことを揚げているのにはいささか苦笑してしまった。都会の人口環境の中で生まれ育ち、ゴキブリを見れば気が動顛しかねない若者が多いのだろう。

オリエンテーションをしてくれた施設の二十代半ばのお嬢さんが「お前は大丈夫か」と言いたげに顔を覗き込むので、「私はゲジゲジやナメクジが好物で、見つけ次第、つまんで口の中に放り込む」と手振りも交えて笑顔で答える。さらに、「体力では若者に負けても、世界の僻地を旅してきた環境への適応力とサバイバル術では引けをとらない。俺は日本男児だ」と大見得を切った。

丸顔の真ん中の大きな団子鼻を

ヒクヒクさせて彼女は笑いをこらえているようだ。

「このゲジゲジは大きいのよ。一匹で満腹になるわ」

「ニシキヘビの輪切りステーキもおいしいという話を日本で聞いた。今夜どこかのレストランへ案内してくれないか」

「ごめんなさい。今夜は彼氏とフランス料理の予定なの」

彼女は軽くないすと、私の一週間のスケジュール表を手渡してくれた。

私には規定通りの二ヶ月の参加はとても無理なので、一週間のプログラムを作ってもらい、特別待遇のボランティア参加となった。

これには訳がある。私は、二十年ほど前からこの施設に毎年わずかではあるが寄付をしてきた。サバ州



政府にとつて、施設の運営は財政上、負担が大きく、オランウータンに関心を持つ世界中の人に寄付を呼びかけていた。

日本円で五万円あれば、現地では調査員三人を一年間雇用できるといふ。毎年、所長名で丁寧な礼状と研究紀要が送られてきており、私はいつの間にか日本における霊長類

の研究家ということになっているのであった。

オランウータンの生態は、ゴリラやチンパンジーに比べるとまだまだ分からないことが多い。その理由のひとつは、彼らがジャングルの中、しかも樹上で暮らしていて、観察が極めて困難だということにある。

もうひとつの理由は彼らが基本的に単独行動者で、チンパンジーのような群れを作らないことにある。一頭を追うと、他の個体の観察はできない。彼らを絶滅から救うためには、その生態が良くわかっていなければ効果的な保護対策を立てにくいのだ。オランウータンは現在スマトラ島の一部とココボルネオ島にしか生息していない。

中国では昔から猩猩(シヨウジョウ)と呼ばれてきたし、中国南部な

どの洪積世の地層から多くの化石が発見されていることから、かつてはもっと広範囲に生息していたと考えられている。

現在の推定生息数は約三万頭だという。しかしこの推定はかなり大雑把なもので、きちんとした調査も



行われていないのが現状だ。別の資料には一万頭、いやもっと少なくても五千等前後しかいないという研究者さえいる。

いずれにしても近年の森林の伐採により個体数は激減した。さらに

最近では、採鉱や石油採掘を容易にするための道路建設、森林の耕作地への転換、森林火災などで、ボルネオのオランウータンは現在の生息地を毎年五パーセントの割合で失っているといわれている。

国連は、人類に最も近い親類で、絶滅の危機に瀕している大型類人猿の救援戦略をすぐにも策定するべきだと呼びかけている。大型類人猿にとって、時計は真夜中(最終時刻)まであと一分のところ、絶滅が危惧されると国連の報告書には書かれている。

私が霊長類の中でも特にオランウータンが好きなのは、その泰然自若とした物腰にある。鳴き声をあげることも少ないし、森の一点を見つめて静かに思索にふけているかのような行動も時には示す。彼らが

「孤独な森の哲人」などと呼ばれる
所以である。

霊長類研究者？

オランウータンと間近にご対面
できる朝がやってきた。今日は一日
中、オランウータンを追って、セピ
ロックの森に入る予定だ。朝飯も十
分食べたし、蛭対策も万全を期して
きた。

意気揚々と副所長のパジャウ氏
に挨拶に行く。

「ミスター・カワサキ、昨夜は残
念な結果だったようだな。しかしチ
ャンスはまだある」

「仕方がない。アブラムはすばら
しいガイドをしてくれた。今日は元
気一杯だ」

しかし、昨夜の悪戦苦闘の様子を

知っている彼は、私を気遣って、
「今日は施設の獣医が具合の悪い
オランウータンを治療するので、そ
の手伝いはどうか。ミスター・カワ
サキのプログラムはフレキシブル
でいい」



と気遣ってくれる。これだと冷房は
ないものの屋内の作業で、冷たい飲
み物もゆっくり飲めるといふ。しか
も獣医はアメリカの学校を出たば
かりの若い女医だといふ。これには
ちよっとところが傾きかけた。

しかし、私は自慢のデジカメで撮
ったオランウータンの傑作デジタ
ル画像を、インターネットを通じて
世界に配信する野望をひそかに抱
いているのだ。ここで日和見を決め
込むわけにはいかない。

「いや、一週間しか時間がないし、
私はフィールドワークがしたい。檻
の中のオランウータンなら、日本の
動物園で見れば十分じゃないか」
と誘いを決然と断った。昨夜はボル
ネオ到着初日ということ、私の体
がまだ十分ジャングルに順応しき
っていないかったし、蛭への気構えも
不足していた。しかし今日こそは心
機一転、準備万端、勇氣凛々、やる
気満々なのだ。

ボランティアの受け持つ分野は
かなり多岐に渡っているが、主なもの、森の中に四か所あるプラット

ホームでの餌やり、体重測定や健康診断の手伝い、畜舎の清掃、森にいるオランウータンの行動観察と記録などである。

私に今日与えられたのは、アブラムが受け持っている四歳のメス、ファウナの観察を、彼に同行しながら行うというものだ。十時の餌やりに現れるファウナを追って森に入り、三時の餌やりで再びプラットホームに現れるまで追跡する。

オランウータンの生活はほとんど樹上で行われる。しかし彼らの動きは案外緩慢で、日本猿がやるように枝から枝に飛び移ったり、飛び降りたりといったことはほとんどやらない。人間が木の枝を移動するときと同じように四肢を使って慎重に移動する。一日の移動距離もニキロメートル以内といわれている。



十時から三時までの五時間ぶっ続けとは人使いが荒いと思ったが、後を付いて回るぐらいなら何とかなるだろう、それに、もしかしたらファウナだって昼寝ぐらい楽しおかもしれない、一緒に昼寝ができる

可能性があるると、出発前は高を括っていたのだった。

アブラムは「トアン、朝飯は十分に食ったか」とすでに額の汗を拭く私に心配そうに聞く。中国人が「飯を食ったか」と言うのは「コンニチハ」と同じような挨拶だと聞いたことがある。アブラムはマレー系で中国系ではないが、中国人も多い地域だから、同じような意味で言っているのだろうと気軽に受け流し、「馬が食うぐらい食った」と突き出た腹をたたきながら答える。

アブラムはイスラム教だから「ブタが食うほど」と言ったらどんな反応を示すのかななどと、気楽なものである。

しかしアブラムはいたって真面目に「水も十分飲んでおいでくれ」と気遣う。

「水はリュックの中にニリットルのペットボトルがある」

「それはダメだ。ここに置いていてくれ」

「どうしてだ。このくらいの重さは大丈夫だ。俺は二十キロを担いでキナバル山を韋駄天のごとく駆け回ることもできる」

「トアン、ファウナが気にするんですよ。飲み物や食べ物を見ると寄ってくるし、場合によってはひったくられて怪我をする」

「なるほど。しかし見つからないように隠れて飲めばいいだろう」

「難しいね。俺は時々やつらを観察しているんじゃないかと、やつらに観察されているんじゃないかと変な気分になるときがある」

結局、いざと言うときに備えて、小さなスポーツドリンク缶をひと

つだけ残すことになった。虫除けのスプレー缶も残してゆくことになった。人間から奪ったスプレー式殺虫剤を大量に吸い込んで死んでしまったオラウータンが出てから、持ち込み禁止になっているという。

今朝ほど宿舎で求めた目が細かい木綿地の蛭対策用の靴下をしっかりと履く。これなら蛭が潜り込んでくることもあるまい。

朝の餌やりに現れるファウナをアブラムと木の根っこに腰掛けて待つ。毎日、餌を貰いに必ず現れるわけではないようだ。その日の気分や腹具合で現れないときもある。いやなやつが先に来ていると、引き返してしまふこともあるという。そんなときは、彼女がどこにいるか探さなければならず、大変のようだ。

しかしファウナはご機嫌よろし



く、朝の餌場に現れてくれた。体長六十五センチ、体重三十五キログラムだとアブラムが耳打ちする。若いので毛並みはあまり濃くなく、色も赤茶色を帯びている。顔がへこんでいて、丸い目と丸みを帯びた小さな鼻面がかわいい。

立ち上がったところを見ると、私の腰あたりより身長はありそうだ。

「体長は一メートルはあるだろう」とアブラムに聞くと、「先週確認したばかりだから間違いない」と自信を持って言い張る。いやそんなことはあるまいと押し問答を繰り返すうちに分かった。動物の体長というのは、頭の先端から尻までの長さを言うのである。

なるほど四つん這いの動物の体長に足の長さを含めるのもおかしいことだと気づく。こんなことも知らず、「日本における霊長類研究者」と呼ばれるままにいい気になっている自分がまったく情けないし恥ずかしい。

ファウナの追跡

しかし、ついに念願のオランウータン追跡が始まった。気を取り直し、

ファウナを追ってアブラムとジャングルに分け入る。

ファウナは、木の枝から木の枝へ長い手を使ってゆっくりとジャングルを渡っていく。アブラムには彼女がどこへ向かうのか大よその見当はついていないらしく、ノートを開いて以前の観察記録を確認するなど、悠揚迫らぬ落ち着いた態度である。観察の基本はファウナの行動を、五分毎に場所と何をしているか記録して行くのである。

私が最初にしたお手伝いはファウナのした糞をすべて拾い集めてビニール袋に詰めることだった。シールに場所と時間を書き入れ、袋に貼り付ける。センターに持って帰り、糞の中に残っている木の實の種などを分析して、オランウータンが何をどのくらい食べているか研究す

るのだそうだ。このデータは森林火災などで失われた森を再生させる基礎資料となる。植林をするとき、彼らが好む実をつける木をたくさん植えようというわけだ。

餌場の近くは観察路も整備されており、下草も払ってある場所が多いので、追跡は楽だった。しかし餌場から離れるに従って、観察路は疎らになり、起伏も増える。

こうなると私は、彼女を見失ってはならじと必死にならざるをえない。棘のある灌木を掴んで飛び上がったか、樹上ばかりを見上げて足元がおろそかになり転倒したりと、早くも悪戦苦闘の様相を呈してきた。

さらに大変なのが、ジャングルの中を何本も横切っている小さな水路を越えることである。いまは乾季なので底は干上がっていると



も多く、水が溜まっ
ていても、深さは
せいぜい一メートル、
幅も二〜三メートル
ほどなのだが、滑り
やすい土手を登り降り
するのが難しい。底

は靴が潜るほど地盤
が悪く、足を取られ
る。ファウナの動き
がいくらゆっくりに
はいえ、樹上を自由
自在に動き回れるの
に比べればやはりハ

ンデは大きい。

オランウータンは下肢に比べて
上肢がかなり長い。私たち遊園地の
ラダーを渡るように、この長い上肢
を振って、木の枝から枝を次々と渡
ってゆく。地上を這いずり回ってい
る私の体は一時間も経つと泥だら
け、擦り傷だらけと相成った。

ファウナにしてみれば、いつもと
違った変なやつが後をつけてくる
し、少しからかってやるかといった
気持ちがあったのかもしれない。木
の枝に腰掛けてこちらをじっと眺
めたり、ツルにつかまってブランコ
遊びをしたりと、いつもの午前中よ
り今朝の移動距離は短いという。

小さな実がたくさんなっている
高さ三十メートルほどの木に立ち
寄り、実を食べ始めたときはホット
した。オランウータンの一日はほと

んどの時間が何かを食べて過ごすといっても過言ではないという。しばらくはこの木の上から動かないだろうと予測できるのである。

アブラムはファウナが採食している木の下に時々潜り込み、彼女が食べた樹皮や果実、葉っぱの食べかすなどが落ちてくるのを袋に集めている。私は双眼鏡を取り出して彼女の表情をじっくり監察することにした。

ファウナは四歳で、まだ子供なので、成長したオランウータンに見られるような前額部の隆起はあまり発達していない。頭髪も疎らで、直立している。そして何よりも眼がかわいいのだ。

オランウータンの目は、視覚的コミュニケーションが発達しているヒトの目と形態が最も似ている。だ

から会話はできなくても、眼は口ほどにモノを言うのである。

言葉を話す眼といってもいい。オランウータン同士も視線や表情による視覚的コミュニケーションをしている可能性が高い。一生懸命、果実をかじっているファウナも時々流し目で私の様子を窺っているようだ。その目は生まれたての赤ちゃんの目のように澄んで

いる。そんな綺麗な目を見てみると、人間社会で汚れてしまった私の目も少し浄化されていくような気分になる。そして彼女の仕種や表情を眺めていると、本当に彼女と会話をしている気持ちになるのだ。ファウナはしばらくすると食べることに飽き

たのか、近くの枝を集めて寝床を作り、昼寝の準備に入った。しばらくは寝床から上半身を起こし、私のほうを窺っていたが、そのうち静かに動かなくなってしまった。私も、暑さと緊張のせいですっかりくたびれたのか、アブラムには申し訳ないと思いつつ、知らない間にまぶたが重くなってきた。



うつらうつらし始めたときだと思ふ。突然、アブラムに揺り起こされた。彼が指差す方向を見ると、なんと頭の上の木の枝に私の脚の太さほどもある蛇がこちらを覗いているではないか。グリーンスネイクという毒蛇だそうだ。眠気もいっぺんに覚めてしまった。さすがのアブラムもこの蛇は恐ろしいらしく、即座に観察場所を移動した。

ジャングルの中で無防備に昼寝などしていると、何が起こるか分かったものではない。

腕時計を見ると二時を回ったところである。三十分近くウトウトしていたことになる。ファウナは起き上がった、身じろぎもせず中空を見つめている。寝ぼけているのか、考え事をしているのか、長い上肢で頭を抱えている。



しばらくじっとしていたが、やっと動き出した彼女を見て、アブラムが「今日は午後の餌も食べに行く気だ」と言う。私には今の位置も方角も滅茶苦茶になってしまったが、餌場の方を窺っていたし、その方角に向けて動き出したからだという。

餌場からはそんなに離れていないらしいが、再びぬかるんだ水路を越える元気も、藪漕ぎをする元気なく、私だけ観察路を使って餌場まで先に戻ることにさせてもらう。

餌場にて

私が餌場に戻ってきたのは三時少し前だったが、すでに四頭の子供のオレンジウータンが集まってきた。二頭ずつがペアを作り、ぴたりと寄り添っている。体長がまだ三十センチぐらいのかわいい子供が、私に近寄ってきて、盛んにズボンの裾を引っ張る。一才を過ぎたばかりだというが、人間の赤ちゃんと同じで物怖じせず、好奇心旺盛のようだ。餌やりのスタッフが、大声でしかりつけるとしぶしぶ離れて行

った。

人懐っこく、寂しがり屋なのは、人間に飼育されたオランウータンの特徴だそう。彼等は人のぬくもりを求める。しかし、スタッフの方は、けして彼等に必要以上にふれ合うことはしない。人のぬくもりを覚えてしまうと、自ら野生に帰ることを拒否してしまうからだ。

餌も必要最小限しか与えない。満腹になるほど与えてしまうと、自ら進んで餌を採取しなくなってしまう。SORSは開設以来、約千頭のオランウータンを森に戻したという。しかしそのうちの四十パーセントがセンターに戻ってきてしまった。このようになりハビリに果たしてどれだけ意味があるのか疑問も出されている。

しかし親を失った子供のオラン

ウータンが自然の森の中で生き延びることは不可能に近いという。木の登り方、餌の採り方、寝るための巣の作り方など、いずれをとっても親からの学習が必要なのである。このセンターに連れて来られた直後の子供は精神的ダメージを受けており、うつ状態で食べるものも喉を通らないといったことも多いそうだ。インフルエンザに罹って死んでしまう子供もいる。

三時少し前になって、餌場へと続くロープを伝わってファウナが戻ってきた。他の仲間に遠慮するようにバナナを一本取り、皮を剥いてゆっくり食べる。私が近くにいても承知しているようだ。しばらく仲間と遊んでいたが、再びジャングルの中に戻って行く彼女の後姿を確認して、私も宿舎に戻ることにした。



手のひらの傷が思い出したように痛み出した。下着は絞れば水が滴り落ちるほど濡れているし、泥だらけだ。アブラムに別れの挨拶を言うのもそこそこに、重たい足を引きず

って帰路に着いた。かねてからやってみたいと思っていたオランウータン観察のフィールドワークの真似事を初めて経験したわけだが、喜び一杯というには程遠く、なぜかこころは晴れなかった。

彼らが本当に野生を取り戻すことはできるのか、彼らを返すべき森はどのくらい残っているのか、今日のファウナの行動にどのくらい飼育の影響が出ているのか、疑問は次々と湧いてきた。

ヒトに近い大型類人猿を絶滅から救うことは、より持続可能な将来を形成する人類の能力にとっても大きな象徴的意味があるだろう。大型類人猿の問題は大型類人猿だけの問題ではない。生態系の重要な指標であり、熱帯雨林の健全性と多様性の維持に重要な役割を果たし



ているのである。

彼等の棲む場所を、私達人間が奪わなければ、こんな思いを抱えなくても済むのだ。彼らの眼が「森を潰さないでくれ」と訴えているように思えてくる。ここでのリハビリはオ

ランウータン保護に役立つというとは思わないが、最終的な解決策はボルネオの豊かな森を守っていくことしかないのではないだろうか。

風邪

意気込んで始めたフィールドワークだったが、三日目に頓挫してしまった。ついに風邪を引いてしまったのだ。朝起きると喉が痛い。鼻も詰まっているし、少し熱もあるようだ。日本から持参した下着類がすべて汗で濡れてしまい、洗濯が追いつかないため、裸のまま寝たのが良くなかったのだ。

ボルネオは典型的な熱帯であるが、日本の気象庁が言うような「熱帯夜」はまずない。気温が二十五度

以下に下がらない夜を「熱帯夜」と
いつているが、セピロックの森では
朝方は二十度近くまで必ずといっ
ていいほど気温が下がる。

疲れもたまっているようだし、意
地を張るのは止めて休養すること
にする。副所長のパジャウ氏に相談
に行く、ここにもクリニックがあ
るし、風邪薬もあるという。オラン
ウータンと同じ薬を飲むのはいさ
さか抵抗があるが、彼の説明によ
ると人間の飲む薬と同じものを使
っているという。考えてみれば、わ
ざわざオランウータン用の薬を開
発する薬品会社もあるまい。

マレーシア国産だと渡された錠
剤は、ひとつが親指の先ぐらいある
ではないか。三粒飲めといわれたが、
飲み込むのに大変だし、食道の途中
で引っ掛っているような違和感が

残る。変なところで日本の製薬メー
カーの技術の高さに感心すること
になった。

薬を呑み終わった私を、頼みたい
ことがあるからお茶を飲んでいけ
とパジャウ氏が誘う。こんなに面倒



を見てやったのだから寄付金をも
う少しくれとでも言われるのかと、
身構えながらソファアに腰を落と
す。

「ミスター・カワサキはこの後、ス
カウ村を訪問する予定ですね。依頼
された車と宿の手配は今日終わ
りました」

「ありがとう。スカウ村を起点にし
て、キナバタンガン河周辺の森を見
てみたい。テングザルにもぜひ遭
いたい」

「実は今週一杯でボランティア・ワ
ークが終わる若者がひとり、スカウ
に行きたいといっているのだが同
行させてもらえないだろうか」

「いや、私は気ままな旅がしたいし、
はっきりした日程も決まっている
わけではないんです」

「予定はあなたに合わせるし、自由

でいいと聞いている」

「若いやつとは行動のペースも、何に関心があるのかも違うし・・・」

「そうか残念だな。まじめで熱心なギャルで、ここまで来たからには野生のオランウータンやテングザルも見て帰りたいと言っている」

「ギャルというと女性ですか」

「そうだ、なかなかチャーミングだぞ。それに若い」

「ふうん、それはどうでも良いが、オランウータンに関心があるといえば同好の士、志を同じくするものとして、お助けしない訳にはいかないでしよう」

「そう言ってくれると私もうれしい。若い娘だし、車のチャーター代はミスターがもってくれるとありがたいのだが・・・」

「もちろんだ。一人で行くのも二人

で行くのも同じ。旅は仲間がいたほうが楽しい。キナバタンガン河のクルージングに同行したいなら、船代も私が出しますよ」

パジャウ氏は、今すぐに私に引き合わせたいと言って、部屋を出て行った。

キムとの出会い

パジャウ氏が連れてきたのは、身長が百七十センチ以上ありそうで、服飾モデルと言ってもいいようなスラリとした体型の女の子だ。年のころは三十代半ば「ぐらいだろうか、栗色の髪が緩やかに曲線を描いて肩に架かっている。切れ長の大きな眼は、可愛いというより、意志の強そうな知的な女性を感じさせ、ジーンズと半袖のTシャツというシ

ンプルな出で立ちがかえって清潔感を醸し出している。

握手のために差し出された手はしっかりとした湿り気と柔らかかな弾力がある。照れ隠しに、仕方なく連れて行くのだという渋面を作ろうとしても、自然と笑みがこぼれてしまう。

「キムといます。ロンドンから来ました。よろしくお願いします」

「日本から来たカワサキです。いやカワサキは長い、呼びにくい、ディフィカルトね。コーヨーと呼んでください。コーヨーのコーはひかり、ライトね、いやそれは関係ない・・・」

内心の喜びを隠しようもない私の声は少し上ずっている。落ち着け、落ち着け、ここで日本男児の威厳を見せておかねばならんと、紅茶を勧める。初日にオリエンテーションを

してくれたお嬢ちゃんが、ニヤニヤしながら紙コップの紅茶を彼女に差し出してくれた。

「私はキム・ノバックのファンです・・」

「ご存じない。いやいや、昔の女優ですからね。いま生きていれば七十歳ぐらいになるかな。ヒッチコックご存知。知っている。いや、その映画の・・」

「私はロンドンに住んでいます、ドイツ生まれです。ハリウッドの映画はあまり観たことはありません」

「いやいやそんなことはどうでもいい。私の言いたいことは・・」

「ミスター・コーヨー、出発は明後日、朝七時と聞いています。スカウ村での宿泊は、レインフォレスト・ロッジでよろしいでしょうか」

「はい、パジャウ氏の話だと、そこ

が最も良い宿泊場所だということですよ」

「二ヶ月間ここでボランティアをしてきましたが、どうしても本当の野生のオランウータンを見たくて、パジャウさんに相談したんです」



「その気持ちは私も同じです。キナバタンガン河の流域を、ボートをチャーターして回るつもりです。私もひとりより誰か連れがいたほうが楽しいし、心強い」

キムは私が訪れようとしている

スカウの村やその周辺のことをすでに良く調べているらしい。こまごまとした段取りは、私よりむしろキムがてきぱきと決めてくれた。

「ご親切ありがとうございます。楽しみにしています。私はまだ今日の仕事があるのでこれで失礼します」そう言って笑顔を作ると、彼女はモゾモゾ言いかける私を残して、さっさと仕事に戻っていった。

先ほどまで少し熱があるような気がしていた私だが、彼女の若いオラが乗り移ったかのように、気力が湧いてくる。今日は街まで出かけて新しい下着を買おう、それにドイツワインがあれば二人の夕食のためにも用意しなければならぬと、早くも恋人と初めてのデートに臨む若者のように私のこころは逸るのであった。

スカウ村へ

ジャカラランダの花が露をこぼし、小鳥が鳴き交わしている。熱帯とはいえ、早朝の空気はひんやりとして気持ちが良い。

キムはキャンバス地の大きなバッグをトランクに放り込むと、ランドクルーザーの後部座席の私の隣に勢い良く飛び込んで来た。今日は黒のノースリーブのシャツとダークグリーンのパンタロンである。おき出しの肩と腕がまぶしい。

宿舎の庭で遊んでいる鶏を蹴散らして、車は勢いよく出発した。運転手は、六十歳ぐらいの、ソンプレ口を被ればメキシコのとんまな盗賊といった感じの男だ。頬から口の周りにかけて伸び放題の草むらのような髭を生やしている。髭に隠れ



そうな口から、私には良く聞き取れない英語で盛んに冗談と唾を飛ばす。キムが笑っているのだから英語には違いない。

セピロックからスカウまでは車

で四時間程度の行程である。しかし途中の村で開かれる青空市場を覗いたり、石灰岩でできた大きな鍾乳洞を探検したりするので、到着は夕暮れ時になる。キムの希望で古着の青空市場にも立ち寄ることにする。

出発してからはしばらく緩やかに起伏する片側二車線の舗装道路が続く。まっすぐ伸びる道の両側はアブラヤシのプランテーションが延々と続いている。かつてはここもいろんな樹種が生い茂った熱帯雨林だったはずである。しかし何年か前から、伐採した木材を輸出するところが国の経済を支えるようになる、様相は一変する。木を切った後には、追いうちをかけるようにゴムの木やカカオのプランテーションが広がった。それらが安くなって採算が合わなくなったいまでは、ほと



んどがアブラヤシの農園になっている。

アブラヤシの栽培が広がったのは、「地球環境にやさしい」という触れ込みで、植物油で作った石鹼が世界中で広まったためだと聞いては苦笑せざるを得ない。

開発途上国における開発と環境

保全の両立は簡単に解決できる問題ではない。先進国の人間が豊かな生活に安住しながら、途上国の環境破壊を非難するだけでは、現地の住民は納得しない。

スカウ村周辺は、NGOによるエコツアーの導入で、環境と開発の両立を図る試みが成功しつつある地域なのだ。

「これから向かうキナバタンガン河周辺の熱帯雨林は、世界でもっとも動物の種類が多い森のひとつと言われているんだ。そこには、アジアゾウ、スマトラサイ、ウンピョウ、オランウータン、テングザルなど貴重な動物がたくさん住んでいる。このうちいくつに会えるかいまからワクワクしている」

キムの前で私も思わず饒舌にな

る。

「プロフェッサー・コーヨーはポルネオの動物のことを調べているんですか？」

「プロフェッサー？」

「パジャウさんが日本の教授だと・・・」

「いやいや、コーヨーと呼んでくれ。君もキムと呼んでいいかな」

「OK コーヨー」

なぜパジャウ氏が私のことを教授などと彼女に紹介したのかいぶかしく思ったが、なんとなく理由が分かった。

立花隆が、日本の霊長類研究の第一線で活躍している人たちにインタビューしてまとめた「サル学の現在」という分厚い本を、私は日本を出る前に繰り返し読んできた。

その本の中に出てくるたくさん

の類人猿に関するエピソードを、私はパジャウ氏との夕飯の席で得意げに話したのだった。いかにも自分が観察したエピソードのように話す私を皮肉って、パジャウ氏はプロフェッサーとキムに告げたに違いない。

しかし考えてみれば、キムは二ヶ月もの間、オランウータンと付き合ってきた訳だし、私より彼らの生態については詳しいに違いない。まったく赤面モノである。

彼女は二ヶ月間、五頭いる乳幼児の世話に従事していたという。毎朝、最初にする仕事は、寝ているケージから遊びのためのケージに彼らを移すことだという。その後、寝ていたケージの清掃をして、新しい寝床を作る。乳幼児といえども、中空にタオルで寝床を造ってやり、地上で



寝るのではなく樹上で寝るのだという習慣をつけるのだという。ミルクを飲ませたり、体を洗ってやり、一日中結構忙しいらしい。

世界中から訪れる観光客のため

に、パンフレットを作ったり、SOCのインターネット・ホームページの更新をしたり、事務的な仕事もこなしたという。

「ロンドンとあまりに環境が違ってしまう。毎日、新しい発見があり楽しかった。あつという間の二ヶ月でした」

「オランウータンは七歳ごろまで母親と一緒に暮らしながら、生活技術を学ぶというから、乳幼児で独りになるのは可哀想だね」

「本当の母親みたいに私に甘えてくるから情が移るのよね。だけど必要最低限のことしかやってあげてはいけないというから、葛藤が出てくるのよ。切なくて、一緒に抱いて寝たいと思うときもあるのよ」

キムは、私の英語力でも分かるように身振り手振りを交えながら、必

死で説明しようとする。

親から切り離された乳幼児のオランウータンは、そのままでは木登りも、巣を作ること、餌を見つけることもできないという。本能のままでだけでは生きて行けず、学習が必要ということ、彼らの世界にも「文化」があるということなのだろうか。

舗装道路は最初の一時間だけだった。幹線道路から別れると舗装はなく、車は洗濯板の上を走っているように上下左右に激しくゆすぶられる。その上、前を他の車が走っていると、土ぼこりがひどい。

視界が利かず、いつ対向車が現れるかも分からず、真剣に正面衝突の心配をしなければならぬ。しかし運転手は慣れた様子で、「マッサージ・ロード」と大声で叫び、にやり

と笑う。「ソフトタッチの方がいい」とこちらも大声で言い返してやった。

何度か車の天井やキムの肩に頭をぶっつけ、からだバラバラになりかける頃になって車はや々と停まった。土埃の道が突然終わり、目の前には茶褐色の水が滔々と流れていた。川幅二百メートルくらいはあるだろうか、キナバタンガン河に着いたのだ。

きれいな流れというには程遠いが、埃だらけの乾燥した大地を走ってきた身にとってみれば、まさにオアシス、ここを潤してくれる清き流れなのだ。川岸は堤防もなく、自然の土手のままである。

緑の樹林が兩岸を埋め尽くし、川沿いに良く見られる漁師たちの家も見えない。緩やかにうねりなが



ら地平線の奥に消えてゆく姿は、空に溶け込んで、まさに天上から流れ下ってくるかのようなのである。

レインフォレスト・ロッジ

ここから先に道路はない。キナバタンガン河とそこに流れ込むたくさんの支流を利用した水路が交通路となっている。河の流れは穏やかで、上流から水草がゆっくりと流れてくる。村の若者が小さな木製のボートに荷物を積み込んでエンジンをかける。

風を切って進むボートが心地よい。キムは強い日差しに眼を細め、周囲の森を眺めている。茶褐色の流れと深い緑の森が対照的だ。水の色が茶褐色なのは雨が降ったせいではない。島の大部分の表土は、柔らかい堆積岩でできていて、河に流れ込んだ細かな砂の粒子は容易に沈殿せず、流れの中に漂っているからだ。アブラヤシなどの農園が広がり、

表土が流出しやすくなったことも濁りを大きくした。

レインフォレスト・ロッジは、河を二十分ほど遡ったところにあつた。河の土手に突き出すように作られたテラスに落ち着き、まずはキム



とビールで乾杯する。少し生ぬるいので、給仕の女の子に顔をしかめて見せると、ソーラーシステムで発電しているから、冷蔵庫をフルに稼働させられないと申し訳なきさうに頭を下げる。環境保護のためとあれば仕方がない。

飲み水もすべて雨水を利用しているそうだ。屋根の上に貯水用の大きなタンクが載っていた。雨はよく降るのでこれで十分間に合うという。軽石を削った濾過器で濾し、きれいな水を作っていると、女の子は今度は自慢げに微笑んだ。

このロッジはキナバタンガン河流域の環境保全とエコツーリズムを目的としたNGOによって運営されている。職員はすべて地元のを教育して採用している。地元民に社会的・経済的利益を提供しながら



ら、環境を守ることが自分たちの利益にも繋がるという認識を広めてゆくための事業なのである。

キナバタンガン河はボルネオ島のほぼ中央部から流れ出し、全長約四百六十キロの大河である。この辺

りは河口から六十キロほど上流で、広大な低湿地林を蛇行するように流れている。土地の高低差が少ないために、何年かに一度は氾濫し、流れが変わる。元の流れは本流から切り離され、三日月のような湖となってジャングルのあちこちに残ることになる。その上、細かな支流が迷路のように複雑に繋がりが合い、経験を積んだガイドがいなければ容易に入り込めない。開発がしにくい土地であることが保護のために役立つたといえるだろう。

ロッジは、大きな食堂棟と宿泊用のコテッジが三棟だけある簡素なものだ。すべて木造の平屋建てである。一棟が二室に区切られているから、六組十二人が定員ということになる。今日の客は私とキムだけのようである。先ほどの給仕の女の子が



部屋の鍵を持って現れ、部屋に入る前に驚かないで欲しいので、事前でここでのサービスについて説明したいという。普通のホテルの部屋を想像してやってきたツーリストの中には、質素な部屋を見て怒り出す

人もいるという。冷たいビールは欲しいけれども、ここまで来て、テレビやエアコンやバスタブを要求しようとは思わない。

部屋にシャワーがあるかとキムが聞いた。お湯は出ませんけれど、と応える女の子に向かって「当然よ。必要ないわ」と彼女も一向に気にかけない様子だ。部屋は同じコテージの一号室を私が、彼女が二号室の鍵をもらって、夕食まで休憩することにする。

部屋はシンプルだが清潔だ。ベッドを包むように、蚊帳が吊り下げられるようになっていて。窓にはしっかりした網戸が入っていて、これなら蚊に煩わされることもないだろう。肌触りは硬く目も粗いけれど、きちんとたたんだタオルも用意されている。



埃まみれの体を流そうと洗面室に入ると、シャワーの流れる音とキムの鼻歌が隣から聞こえてきた。「キム、気分はどうだ」「最高よ、コーヨーは?」「少し疲れたけど、一休みすれば大丈夫。ナイトクルーズを楽しみにしているよ」

板一枚の壁の向こうでシャワーを浴びている彼女の姿を思い浮かべながら、私も気持ちよくシャワーを浴びた。

ナイトクルーズ

夜九時から、小さなボートでナイトクルーズに出かける。セピロックでのナイトウォークは蛭の襲撃で散々だったが、今度はボートに乗って川を遡行しながら動物を探そうというのだから気が楽だ。歩く必要もない。

キムは長袖のシャツに着替え、蚊の対策も万全だ。懐中電灯の電池を確認し、蚊除けのスプレーをお互いにかかけ合い準備完了だ。

ボートを操るのはロッジの従業員と同じように近隣の村から採用



された若者である。英語教育も受け、ガイドを兼ねている。まだ二十歳を少し過ぎたぐらいだろうがなかなか愛想がよい。

若者はジャマルですと自己紹介した。私に何か言うとき必ず「サー」

という敬称を付けるのも感じがよい。

「トアン、暑苦しいから救命胴衣は着けなくてかまいませんよ。クツション代わりに座席に敷いてください」

「川の深さはどのくらいあるの」とキムが聞く。

「支流に入ると一メートル位です。だけど川底には腐葉土がたくさんたまっていますから、腰ぐらいまで埋まってしまうですよ」

「気持ち悪そうだわ。スイミング向きの川ではないわね」

「トアン、大きなカメラを持っていきますが、写真に夢中になってボートの上で急に立ち上がらないでください。以前それで転覆したことがあります」

「コーヨー、夕食の時にビールを二

本も飲んだことだし、キャプテンの言うように気をつけてね」

ジャマルもキムに、キャプテンと呼ばれてうれしそうだ。ボートは、観光地の湖などにある二人乗りの手こぎボートを一回り大きくした程度だ。真ん中に座席用の板が渡してあり、彼女と並んで座る。ジャマルは船尾で舵を取る。ボートに屋根は無いからスコールが来たら濡れるまでだ。折りたたみの傘は持ってきたが、スコールの雨足の激しさを



考えたらたいして役に立つとも思えない。カメラだけは濡らしたくないので、いざとなったらすぐ仕舞い込めるようにビニール袋を用意してきた。

ボートはしばらくキナバタンガン河を走った後、ムヌンゴル川という川幅十メートルほどの細い支流に入っていく。川というより自然の水路といった感じだ。流れはほとんど感じられない。兩岸の木の枝が、川全体を覆わんばかりにせり出して、川面は暗い。空気は重く湿っているが、日中の暑さはもう跡形も無く、風が心地よい。

倒木や水草が厚くたまった場所を巧みによけながら、ボートはゆっくりと進んでゆく。支流へ入ってからはエンジンを止め、音の静かな電動スクリーを利用し始めた。動物

達へストレスを与えずに、できるだけ接近するための。

ジャマルは、慎重に進路を選びながらも、前方の闇に注意深く眼を配っている。何か気配を感じると、ボートを停止させ、じっと耳を澄ませているようだ。そんな時、右側の岸の奥で、虫の声に混じって枯れ枝を踏みつけるような乾いた音が一瞬聞こえた。ガサツと葉がこすれるような音も聞こえた。若者が音のした方角をサーチライトで照らす。長い顔が梢の間から覗いていて、眼がサーチライトに鈍く反射した。

イノシシだ。突然のライトにびっくりしたのかキョトンとした顔で動かない。頭から背中にかけて毛がたてがみのように立っている。口の上の両側にひげがたくさん生えているからヒゲイノシシだとジャマ



ルが教えてくれる。慎重に立ち上がり、カメラを向けようと構えると、危険を感じたのか梢の向こうにサツト身を隠してしまった。

イノシシはこのあたりで一番良く見られる哺乳動物だという。畑や

集落の近くにもよく出没するらしい。イスラム教徒が多いボルネオでは、豚と同じようにイノシシは嫌われていて、捕獲したり肉を食べたりする人がいない。繁殖力旺盛のイノシシは大手を振って子孫繁栄を図れるわけだ。ジャマルは最初に見つけた動物がイノシシだったので、「ノー・グッド」だと盛んに私たちに謝る。

それにしても、ジャマルの目の良さには驚いた。わずかな月明かりを頼りに両岸の草むらや樹上に目を凝らし、かなり遠くからでも小さな動物まで見つけてしまう。河にせり出した梢に止まっている親指ほどの小さなカエルを、十メートルも離れたところからライトもつけず見つけたときは私もさすがに驚いた。ボートを手が届くぐらい近くに寄



せ、ライトで照らしてもらってようやく私には確認できた。

キムも目はかなり良いらしく、ジャマルが指差す方向に懐中電灯を向け、すぐに何かを発見する。ジャマルとキムが二人で「あれは何だ」、「きれいだ」、「動いた」などと会

話を交わしている間、私も必死に探すがなかなか見つけれない。イライラしている私を見たキムが、両手で私の頬を挟み、顔の角度や向きを調節してくれる。

「大きな枯れ木が水面に横たわっているでしょう」

「・・・・・・・・」

「右岸から一メートルぐらい内側よ」

「木は分かった。そこに何がいるの」

「その脇よ。クロコダイルの上半身が見える」

「・・・・・・・・」

「アツツ、いま潜っちゃったわ」

キムはいかにも残念そうに私の横顔を覗む。

ニコンの高級双眼鏡も、ここではあまり役立たない。何十メートルも

先の遠くのものを見るわけではないのだ。視界が狭まる分だけ目的のものを見つけにくい。いったん視界に入っても、わずかでも手が振れると見失ってしまう。

「トアン、鳥には興味がありますか」

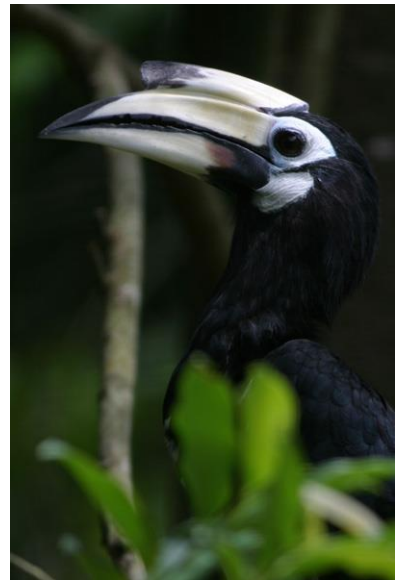
とジャマルが聞く。

「見られればなんでもいいよ。大きなやつでないのだめだぞ」

「イエスサー、鳥はいまだき寝ているし、ライトを当てても逃げないから、すぐ見つかる」

ジャマルも私の目の悪さを哀れんで、発見しやすい動物に目標変更というわけだ。

いままで水面や両岸の草むらばかり注意していたが、川べりの木の枝を見上げると、すぐに大きなくちばしのきれいな鳥が見つかった。ジ



ヤマルが、持参した「ボルネオの野鳥」というハンドブックをめくって指差す。懐中電灯で照らされたガイドブックと羽の色が少し違うが、サイチョウ（ホーンビル）という名の鳥らしい。羽を広げると一メートルにもなるという。

鳥は懐中電灯で照らしても、かなりポートを近づけても身じろぎもしない。これが昼間だったらすぐに飛び立ってしまうだろう。両足の爪で掴むように木の枝に止まっているが、ぐっすり寝込んで、木から落ちるようなことはないのだろうか。と心配になるぐらいじっと動かない。カメラのフラッシュを浴びせてもまったく動じないのだ。この夜は、サイチョウの他にも、カワセミ、コサギ、ヘビウ、フクロウを見ることができた。



ハイライトは最後にやってくるものだ。この夜の一番の収穫はシベツトを見つけたことだ。野生のイチジクの木に陣取り、緑の実を盛んにかじっている。子連れのような。

四つの眼が金色に光っている。シベツトはマングースと同じジャコウネコ科の仲間である。猫とリスの間みtainな動物だ。体調は六十七センチほどもあり、背中には黒と白の縞模様がかくつきりと浮かぶ。ポートを近づけると耳をピンと立てて、警戒するようにこちらを睨んでいたが、じっとしていると再びイチジクの実を食べ始めた。食べるのに夢中なのか、ライトを当てても気にしない。ライトがまぶしくないかと思うほど目が大きい。しばらく見とれていたが、写真を撮ろうとカメラを構えるとスルスルと木を走り降り、見えなくなってしまう。

キムも息を殺して見入っていたらしく、大きな息を吐くと、体の緊張を解く。木の実を食べている絶好のシャッターチャンスは逃してし



まったが、美しいからだの模様とイチジクの実をかじるかわいらしいしぐさを十分に眼に焼き付けることができた。ジャマルも最後に珍しい動物を見せることができて得意げだ。

ポートが帰路についたのは、既に十二時を回っていた。時間を忘れるほど、動物を探することに熱中していたわけだ。狭いムンゴール川を抜

けて、キナバタンガン河に出ると、
視界が開け、空が急に大きく広がっ
た。満天の星だった。河を斜めに横
切るように天の川が横たわってい
る。私もキムも、体全体に心地よい
風を受けながら、ただ黙って星を見
つめていた。

テングザル

「ホー、ホー」というオランウー
タンどうしが鳴き交わす声で眼が
覚めた。オスが存在を示すためのデ
モンストレーションである。外はま
だ暗い。しばらくベッドの中でまど
ろんでいたが、思い切って部屋の外
に出た。

朝靄が厚く立ち込めている。天気
が悪いわけではないが、毎朝のよう
に靄が出る。朝の放射冷却による気



温の急降下によって、もともと百パ
ーセント近い湿気を含んだ空気
が水蒸気を蓄えきれなくなるのだ。
しかし陽が昇る頃になり、東の空

が徐々に明るさを増すと、朝靄は静
かに森の上の方に流れて行き、あっ
という間に消えていった。水滴が細
かい霧状になって湿度の低い林冠
の上へと逃げていくのだ。

黒いシルエットだった川の向こ
うの木々も茜色の空を背景に、次第
に輪郭をはっきりさせてくる。もし
て木々の林冠の向こうから真っ赤
な太陽がゆっくりと姿を現す。鳥た
ちがそれを言祝ぐかのように、一斉
に鳴き始める。それぞれの鳥は勝手
に鳴いているはずなのに、私には調
和の取れた響きのようにも感じら
れる。これから始まる一日の大序曲
のようだ。

誰もいないテラスでぼんやり河
を眺めていると、通いの従業員たち
が次々とボートでやって来る。みん
な礼儀正しいし愛想が良い。給仕の



女の子がすぐに紅茶を入れてくれた。キムも、どこで見つけたのか猫を抱いて現れる。

「コーヨー、おはよう」

「キム、おはよう。その猫は？」

「朝方、部屋の外で鳴いていたから、部屋に入れてあげたの。私のベッドで寝ていたのよ」

彼女は、猫をそっと床に降ろしてやった。

「猫がうらやましい」と言おうと思っただが止めた。

「今日はキナバタンガン河を遡って、テングザルを捜しに行く」

「オッケイ、コーヨー」

「活動が活発な午前中が勝負だ。昼食はロッジに帰って食べる」

食堂の壁に貼ってある手書きの周辺地図の前へキムを連れて行き、昨夜ジャマルと打ち合わせした場所を示す。

三日月湖がある辺りだ。テングザルは川沿いのマングローブ林や低湿地林が好きで、河に張り出した木の枝などにいることが多い。それを



ボートの上から観察しようというわけだ。

簡単な朝食を早々に切り上げ、迎えに来たジャマルの船に乗り込む。昨夜のクルーズの後にはたっぷりチップをはずんでおいたので、今朝

のジャマルは昨日に増して愛想が良い。

「トアン、今日は、川浴いにあるカフェへご案内します。コーヒーが飲めますよ」

「こんなジャングルの中にカフェがあるのか」

「つい最近、村の若者たちが共同作業して作ったんです。おいしいコーヒーが飲めますよ」

「冷たいビールはあるか」

「トアン、それは無理です。冷蔵庫がありません」

「それもそうだな。キム、コーヒーを楽しみに、さあ出かけよう」

ボートは勢い良くキナバタンガ
ン河の川面をすべるように上流に
向かう。真っ白いサイチョウが大き
な羽を広げて河の上を悠々と飛ん
でいる。川魚を狙っているというの



だが、こんなに水がにごっていて魚
が見つかるのかしらんとふと思う。
網を仕掛けたり、釣りをしたりし
ている漁師の船を時々見かけるの
で、魚はいるには違いない。しかし
こんな泥水の中にすんでいる魚で
は、泥臭くてあまりうまくはないだ
ろう。

昨日の夕食に出されたエビはこ
の河で獲れたものだといっていた
が、身が硬くて、私もキムも少し箸
をつけただけだった。

ジャマルはガイドになる前は、父
親と一緒にエビ漁をやっていたと
いう。河の濁りは年々ひどくなる一
方だと嘆いた。上流部の農地の開発
が進んで、土が河に流れ込みやすく
なっていることが原因らしい。

漁師の乗ったボートとすれ違
うたびに大声で挨拶を交わす。キムも
笑顔で手を振って応えている。四十
分ほどで本流から三日月湖に向か
う支流に入った。昨夜のムヌンゴー
ル川よりもさらに川幅は狭く、ポー
トの底が川底に付きそうなぐらい
浅い。

これから目指すテングザルの群
れは、三日月湖の岸や近くの氾濫原



に最近良く出没するという。テングザルは現在、ボルネオ島にしか生息が確認されていない絶滅が危惧されているオナガザル科のサルである。その個体数や生態もほとんど分かっていない。それだけに期待も膨らむ。十分ぐらいで細い水路を抜け

た。

三日月湖は本流に比べると流れが緩やかなせいなのか、水が澄んでいる。上空の雲が白く映ってまぶしい。湖といっても蛇行する川の流れが起源なので、五十メートルほどの幅で緩やかにカーブしながら、ジャングルの奥まで長細く続いている。

ジャマルは周囲の森に目を配りながら、ゆっくりとボートを進ませて行く。

キムが森の一角を指差した。大きく林冠を広げた岸辺近くの木の枝が揺れている。ジャマルがそちらに向けてボートのスピードを上げた。

十数頭ほどのテングザルが一本の木の枝に鈴なりになっているではないか。子供がたくさんいるようだ。茂った葉にからだ隠れてよく見えないが、盛んに木の葉を食べてい

るようだ。

一頭だけ高い梢に陣取って、こちらを睨んでいるやつがいる。肩から胸にかけて金色の毛が光っている。どうやらそいつがボスらしい。顔には毛がなく、酒に酔ったような赤褐色の皮膚をしている。そしてなんと





いっても特徴的なのが、異様ともいえるほど大きく立派な鼻である。これを天狗の鼻に見立ててテングザル (proboscis monkey) というのだが、即座に納得できる。ちなみにテングザルは英語ではプロボシス・モンキ

ーというのだが、やはり長い鼻のサルということだ。

メスはオスのボスザルの半分ぐらいの大きさだ。毛の色や顔の皮膚の色はオスと同じだが、鼻は雄ザル程ほど大きくない。枝に腰掛け、小さな黒褐色の実が房になつていのを手繰り寄せ、かぶりついている。腹が膨らんでいるので妊娠中かと思つたが、オスも同じである。でっぱったお腹は、繊維質の植物を効率良く消化するために、腸が伸びた結果らしい

子ザルたちは親から少し離れたところで、樹幹の上り下りを繰り返したり、下の枝めがけてダイビングしたりしている。やはり子供は遊び好きと見える。

テングザルの群れ構成は一頭の強いオスが複数のメスを囲む「ハー

レム」になっている。この群れでは四頭のメスと七頭の子ザルを確認できた。ハーレムを作れないあぶれたオスは、オス同士で群れを作り、回遊しながらメスを獲得するチャンスを覗う。

キムは小さなノートを取り出し、彼らのユニークな姿を鉛筆で盛んにスケッチしている。私の双眼鏡を



時々横取りしては、顔の細部を確認しているようだ。

キムのスケッチが完成したのを見計らったように、群れが移動し始めた。腹が出ていて一見肥満気味なので運動能力を疑ってしまうが案外身軽だ。高い木の枝を揺らし、その反動を利用して隣の木に飛び移る。子ザルを抱いたまま飛び移るメスもいる。

群れを追うために上陸するかとジャマルが聞いてきたが、キムと相談して止めることにした。蛭が怖かったわけではない。二人ともこの群れの観察をすでに十分堪能したので。一時間以上も彼らに眼を凝らしていた。

「ジャマル、ティータイムだ」
出掛けに彼が教えてくれたジャングルカフェを思い出して声をか

ける。

「トアン、アイアイサー」

ジャマルは、私たちの目的のテングザルの群れをいち早く提供できたことで一安心のようだ。すぐ近くだと笑いながらボートを湖の奥のほうに進める。岸の一角に草むらが刈ってある場所があり、そこが船着場だ。ジャングルに潜り込むように、下枝がきれいに払ってある小道を少し登ると湖の見晴らしが良い小さな原っぱに出た。そこにニツパヤシの葉で屋根を葺いた小屋が建っていた。中には湖の方に向けて木のベンチとテーブルがしつらえてある。

「トアン、ジャングルカフェによる。」
「こそ」
ジャマルはそう言うと、背中の中のスッパサックの中から魔法瓶と白い



紙のカップを取り出した。コーヒーのいい香りが漂う。

ジャマルはコーヒートを淹れ終わると、ボートで待っていると坂を下っていった。渴いた喉に流し込むコ



ーヒーがうまい。二人とも顔を見合
わせて、思わず笑ってしまった。

「冗談だと分かっていたの」

「いや、本当だと思っていた。近く
の村の連中が観光客相手に商売を
しているのかと」

「私もよ。だけど客がこの人数では
商売にならないわね」

キムの口から健康そうな白い歯
がこぼれる。

蝉の声が聞こえるだけで、湖の周
りは静かだった。時折、鳥たちが鳴

き交わしながら水面を渡っていく。

テングザルのしぐさはとても人
間くさいし、愛嬌がある。メスが子
供を懐に抱いている姿などは、人間
とまったく同じと言っているのではな
がぬいぐるみを着ているのではな
いかと錯覚するぐらいだ。背中の子
ヤックをはずして、額の汗を拭きな
がら人間が出てくることを想像し
て思わず笑ってしまった。

「コーヨー、何で笑っているの」
キムが振り向きながら聞いてき
たが、私が次に思い浮かべたのは、
手塚治虫の「鉄腕アトム」に出てく
る「御茶の水博士」の鼻だった。

「あの大きな長い鼻はとてもユ
ニークだけど、どんな役に立ってい
るのかな」

「葉っぱを食べているときに、邪
魔になるんじゃないかと思ったわ」



キムは葉を食べるマネをしなが
ら、おかしそうに応える。

「メスに比べて、オスの方が大き
いということは、セックスアピール
かもしれないな」

「ふふふ、とても目立つアピール
ね」

二人とも、先ほどのテングザルを
見た感激の余韻にまだ浸っていた。
大きな群れにいち早く遭遇するこ
とができたのは何よりの幸運だっ
たが、川の上から少人数による観察
ということであまり警戒されずに



近寄れたことも大きい。サル群れも私たちの存在を当然承知していたが、謙虚そうにしているからしばらく見物させてやろうと判断したに違いない。

テングザルはオランウータンなどの類人猿に比べれば、「下等」なサルなのだが、私にとっては一番馴染めるサルなのかもしれない。この森がいつまでも彼らにとって楽園であり続けることを願わずにはいられない。

最後の晚餐

燃えるような落日がキナバタンガン河の川面を照らしている。さざなみがきらきらと輝き、金色の帯を渡したように川面に伸びている。さくろの汁をこぼしたような茜色の雲が、対岸の黒く沈んだ森の上に広がっている。ねぐらへ帰るのだろうか、鳥たちの群れが黒いシルエツトとなってその雲をよぎる。

ロッジの食堂にはいま私一人だ。ゆったりと椅子に腰を沈め、河の流れを眺めていると、一日の興奮と緊張が解きほぐされていくような気がする。地元の人たちがロクジハンゼミと呼んでいる蝉の鳴き声が風に乗って川向こうの森から聞こえてくる。

空腹だし、ビールが呑みたかった



が我慢していた。キムが厨房で、従業員を指示しながら夕食の準備をしていた。もうすぐできるはずだ。そうしたら昨夜から冷蔵庫に預けてあるワインを開けよう。

ロッジの食事は宿泊代と込みになっ
ていて、セットメニューである。
二人とも脂っこい炒め物中心の料
理に飽いていた。それに毎回、泥臭
い川魚やエビでは閉口する。最後の
ディナーの料理は、ロッジの厨房を
借りて、私が自分で作ると彼女が言
い出したのだ。

幸い今日は他の宿泊客はいない。
夕方、二人で近くの村へ出かけ、鶏
肉と卵、それにトマトやジャガイモ
など、いくつかの野菜を買ってきた。
私がサンダカンで買ってきた赤白
二本のワインがロッジの冷蔵庫に
預けてあるという、白ワインは料
理に使いたいと彼女に取り上げら
れてしまった。

食事の時には、この地方のムスリ
ムの伝統的な衣装であるサルーン
という布を、腰に巻きつけようとい

う演出も二人で決めた。厨房からは
好い香りが漂ってき始めた。

「コーヨー、できたわよ」

キムが汗を拭きながら、厨房から
出て来てうれしそうに言う。彼女が
着替えに部屋に戻っている間に、給
仕の女の子が皿を並べてくれる。

ワインは調理に使うプラスチック
クのボウルに水を張り、小さな氷を
浮かべた中に横たえてある。ここで
は氷は貴重品なのだ。白いテーブル
クロスや気の利いた食器はないけ
れど、冷えたワインが一本あればそ
れで十分である。

足付のワイングラスがないので、
普通の筒型のグラスでよいかと給
仕の女の子が聞く。少し小ぶりのグ
ラスを頼むと、手のひらの上で転が
すようなかわいい丸いグラスを探
してきてくれた。



サルーンを巻いたキムが、部屋の
ローソクを持って現れる。上着は胸
元が開いた長袖の黒いブラウスだ。
シャワーを浴びたばかりらしく、髪
がしっとりとして湿り気を帯びてい
る。口紅も塗りなおしてきたようだ。

荒削りのカンナの痕が残るテーブルの脇にろうそくを立て、赤ワインのグラスをカチッと合わせて、二人だけのディナーが始まった。

キムが給仕の女の子の耳元でなにか指示すると、料理が運ばれてきた。最初に出てきたのはトマトスープだ。先ほど二人で村から買ってきたばかりの完熟トマトを使ったのだろう。いままで脂っこいものが多かったので、トマトの酸味が美味しい。

「キム、いい味だよ」

「コーヨー、ありがとう。厨房にあったコンソメキューブを入れただけよ」

「ロンドンでは自分でいつも食事を作っているの」

「一人暮らしたし、帰りが遅いからマックが夕食なんてことも多いの



よ。休みの日は料理の本を見ながら、その日食べたいものを作るのが好きよ」

いままでの会話では、身の上に関する話題はお互いになんとなく避けていたが、彼女が一人暮らしであることを自ら口にしたということ、は、それだけ打ち解けてきたということだろう。

考えてみれば、彼女がどんな仕事をしているのか、なぜニヶ月ものボランティアに参加したのか、まった

く分かっていない。

「忙しそうだし、重要な仕事を担っているんだろうね。どんな仕事か聞いても構わないかな」

「ドイツ語のインストラクター。生徒はビジネス関係の人が多いわ」

そう言えば、最初に会ったときに、ドイツ生まれだと彼女が言ったことを思い出した。ニヶ月もの休みをどうして取れるのか聞こうと思っただが、その前に彼女が仕事を辞めた気分転換のためにここに来たのだとすぐ付け足した。

なぜ仕事を辞めたのかまで聞くのは、さすがにはばかられる。今度私は私が自己紹介する番だろう。日本で精神科の病院を経営していることや、毎年一、二回は二週間程度の休暇を取って海外旅行を楽しんでいることなどを話した。聞かれたら

独身だと言おうと思っていたが、キムは私の家庭のことは触れようとしなかった。

「私は寒いロンドンから逃げ出したかったの」

「ボルネオを選んだのは？」

「ロンドンの環境NGOがボランティアを募集していたの。お金もないし、セピロックは宿泊と食事付だから、タダで熱帯を楽しんだわけ」

「一番楽しかったことは」

「そうね、毎日のお昼寝かしら」

キムは白い歯を見せて笑った。

次に出てきたのは、大きなオムレツだった。真ん中が大きく膨らんでいたが、マッシュルームとたまねぎを刻んだものが包んである。私が日本から持ってきた醤油をかけようとする、キムは悪戯っぽく顔をしかめてみせ、だめだというように手

を振る。

「コーヨー、中のマッシュルームとたまねぎが醤油で味付けしてあるから必要ないわよ」

私は親に注意された子供のように、即座に醤油をしまいこんだ。

メインディッシュは鶏肉とジャ



ガイモとタマネギを白ワインで煮込んだものだった。鶏肉はかみしめると柔らかなコクがあって、昔なつかしい鶏肉本来の味がする。鶏肉のコクと、白ワインの持つすっきりしたコクがお互いに引き立てあってすばらしい味わいだ。

「キム、五つ星のレストランの料理のようだ」

「コーヨーの持ってきたワインのおかげよ」

「鶏肉も自然の中で育ったものだからおいしいんだろう。それにしても一時間でこれだけの料理が作れるとはすばらしい」

「ロッジの人たちが協力してくれました。みんな素朴でフレンドリーな人たちよ」

外はすでに闇が完全に支配し、河も森も闇の中に沈んでいる。雲が出

たのか星も見えない。テーブルのろうそくの炎が明るさを増したように感じられる。

吹抜けの窓からの風で炎が揺らぐ。彼女はあまり酒に強くないのか、すでに頬が赤い。

給仕の女の子が、鶏肉の煮物のお代わりはどうだと聞いてきたが、二人ともこれ以上食べられないと断った。残りはロッジの従業員に食べてもらうことにする。キムはコーヒーを頼んだが、私には赤ワインがまだ残っている。

「コーヨー、オランウータンの子供はね、すぐ人真似したがるのよ」キムが思い出したように、笑いながらセピロックの話始めた。

「私が風邪気味で、一日に何回も鼻をかんだの。そうしたらブリットという二歳ぐらいのメスの子が、どこ

からか紙を拾ってきて私と同じようにするの」

手振りを交えながら、彼女はブリットの表情を再現してみせた。

「日本には、真似ることは学ぶこと、ということわざがあるけれど、オランウータンも学習する能力がある」ということの証明じゃないかな」

「私が腕組みすると、ブリットもそうするし、欠伸まで真似ようとするんだから」

「私も、親指を立てた握りこぶしを作って、グッドの合図を送っているようなしぐさをしたやつを見たな」

「声はあまり出さないけど、仲間同士で会話していることはなんとなく分かる」

オランウータンの話になると話題は尽きない。キムがさらりと「オランウータンは人を裏切らないわ」



と言ったことが私の胸のどこかに引っかかっていたが、話題は副所長のバジャウ氏の時々見せるひょうきんな態度やあまり面白くない冗談に移っていった。

話題が途切れ、私がウイスキーの
ピンを部屋に持ち帰り、席に着い
たときだった。火照った頬を冷ます
かのように河の方を眺めていたキ
ムが、アツツと呟くと突然立ち上が
った。

「ファイアー」

はじめはそう聞こえた。

「火事？」

背筋を伸ばして、外を眺めたが何も
見えない。

「コーヨー、行きましょう」

彼女はまだ椅子に腰掛けている私
の手をとって立ち上がらせると、私
を引っ張るようにして河へ続く階
段を降り始めた。

ホタルだった。河岸の草むらの上
を無数のホタルが飛んでいた。螢火
が明滅を繰り返しながら、静かにう
ねっていた。震えるように発光した



かと思うと、魂が消え去るように萎
えていく。そのいつ果てるとも知
れない繰り返しを、私も彼女も黙っ
て見つめていた。

私は彼女が私の手を握ったまま
だったことに気づいた。

「キム、座ろうか」

私は岸に打ち上げられた大きな
流木を見つけて、彼女を誘った。腰
に巻いていたサルーンを解くと、そ
の上に敷く。二人並んで座るのには
十分だった。

「ホタルを見るのは初めてだわ。な
んて幻想的なのかしら」

「私は田舎で育ったから、子供の頃
は良く見たよ」

私たちは螢火の真っ只中にいる
ようだった。

「髪の毛にホタルが留まっている
よ。払わないで。髪飾りみたいにき
れいだ」

私は彼女の髪をまじまじと見詰
めながら言った。彼女も私の方をじ
っと見ている。螢火の明滅で、彼女
の顔の輪郭が淡い闇の中で浮かん
だり消えたりした。

「まだとまっているの？」

「うん」

私が肩に腕を回してそっと引き寄せると、彼女は素直に私の肩に頭を預けてきた。髪の毛が私の頬をくすぐり、熟れた果物のような香りがあった。

「コーヨー、明日はお別れね」

私の耳元で彼女がつぶやいた。風が彼女の髪をかすかに揺らし、螢は再び闇の中へ飛びたっていた。

螢火の乱舞はまだ続いていた。それはホテルの命そのものを燃やしているような、寂しく切ない明滅だった。

地球環境と熱帯雨林

サンダカンの飛行場を飛び立った飛行機は、ゆっくり旋回しながら

北に進路を向けた。窓に額を押し当てるようにして、私は眼下に広がる熱帯雨林や、その中を緩やかに蛇行する茶褐色の流れを見つめていた。海岸線を除いた内陸部は黒々とした林冠を敷き詰めた森がどこまでも広がっているが、その森を切り裂くように道路が走り、茶褐色の地肌がおき出している。人跡未踏とか、千古斧を入れざる原生林などという表現は、もはや文学的誇張以外の何ものでもない。

一見豊かに見えたキナバタンガン河下流周辺の森も、実際は川岸に沿ってわずかに残る程度にまで減りつつある。しかも、残された森林は分断されつつあるのだ。

合法的な伐採用に確保されていた熱帯雨林のうち九十五パーセントがすでに切り払われてしまった



だけでなく、スカウのように自然保護林として保護されているはずの森でも約六十パーセントが違法に伐採されているという。

非合法に伐採された木材は合板

に加工され、輸出される。例えば、この島のメランティ材(ラワン)は、日本で作られる家具や私がいま乗っている車の内装にも使われているのだ。

かつて南米アマゾンとともに「地球の肺」と呼ばれたボルネオの熱帯雨林には、二千五百種の木本植物、六百種の鳥、二百種の哺乳類、二百種の爬虫類及び数万線類の昆虫類が生息しているといわれる。

しかし多くの生物が森林の破壊によっていま危機にさらされている。すでに絶滅した種も数多い。現在の減少率が続けば、熱帯雨林に棲む生物の多くが数十年も経たないうちに絶滅するだろうといわれる。われわれはいま、その絶滅の限界点の近くまで来ているのだ。

私はここ数年、世界の乾燥地帯を

旅して、風と砂の声を聞いてきた。私の周りにあまりに横溢する情報の氾濫、人間関係の煩瑣さから一時でも逃れて、何も無い世界、砂と空の世界に浸りたかったからだ。

しかし私はボルネオの森に来て、新しい世界に出会ったような気がする。ここでは生命が満ちあふれている。それに圧倒されたといってもいい。熱帯雨林がなぜ生命にあふれているのか、なぜ多様な生命が渾然一体として生きていけるのか分からない。

生物が多様であるということは、それぞれの生物が熱帯林の中で、他の生命と共生しながら生きながらえていることだ。その生活史を明らかにし、共生の原理を探ることは、われわれ人類にとっても生き延びるための大きなヒントになるだろう。

う。

かつて人類もオランウータンも、この森の中で共生していたのだ。森を出た人類は、鉄を作り半導体を開発し、原子核のエネルギーさえも操れる文明を築き上げた。その世界の過去と未来の狭間に、私はいま生きているのだ。

過去を眺めてみれば、何億年にも渡る生命進化の流れがあり、その先端に多くの生物の共生するボルネオの森がある。この森を私たちは、未来へと受け渡していかなければならない。

世界一豊かになった日本において、失われて行く熱帯雨林の現状に目を背け、世界への想像力を失ってしまっわけにはいかない。

アメリカで起きた同時多発テロ事件後、世界はますます流動化し、



来は不透明化しているように見える。そんな世界の中で、バブル崩壊後の日本人は、自信を喪失し、内向化しつつあるのではないだろうか。時代の風を敏感に受け止める感

性、世界の潮流を正しく理解する力、新しい世界に立体的に関わっていく想像力と行動力がいまこそ求められている。世界の現実を知ろうとするために、私の旅は、これからもまだまだ続かざるを得ないだろう。

キムは昨日の飛行機でロンドンへ帰って行った。空港まで送っていた私に、キムはゲートの向こうは禁煙になるからと、一本のたばこをせがんだ。僕はポケットからショート・ホープを出して彼女に渡し、マッチで火を点けてやった。キムは息ゆっくりと煙を吸い込むと、左手の中指と人差し指で挟んだたばこを目の前にかざした。

「コーヨー、あなたは私にこんな短い希望をくれたのね」

キムはフィルターの付け根のところにあるEONEの文字に視線を落

とすと呟いた。

一瞬、意味が分からず沈黙する私に別れの挨拶を交わすと、キムはいろんな思いを断ち切るように、くりりと背を向けて空港のゲートの向こうに消えていった。

平板な日常があるからこそ、祭りの陶酔が待ち望まれる。退屈な日常があるからこそ新鮮な旅がある。キムも新しい仕事が待っていると言っていた。私も戻らなければならぬ。私を待ち受けている日本の日常の中へ。 おわり

初稿 平成十七年五月吉日
改稿 令和二年九月吉日